

教室の窓から

令和 5年
(2023年) 2月
来須 真紀

学校の対人援助

学校現場に勤めて20年になろうとしています。この20年を通して、学校現場は、対人援助の場であると思いつくづきます。こんなことを現場でいうと、「ちょっと変わった先生だね。」と言われたり、「学校現場が対人援助の場？それは、福祉の分野でしょ？学校は教育の場だ。」と反論されたりすることも多くあります。しかし、学校ごとに定めている教育目標や目指す学校の姿は「子ども同士が思いやりをもち、関わりながら支えあう」とか「地域に開かれ、愛される学校」「子どもとともに成長し、子どもの気持ちをわかろうとする教員」という言葉が多く、学校現場は、対人援助の場であるということが、よく分かります。

誰に援助するの？

では、学校とは、だれに対して援助する場なのでしょう。それは、もちろん子どもたちです。もっと言えば、授業の学習指導の中で子どもたちに対する援助をするのが学校の一番の役割ともいえるでしょう。ただ、学習を進めるにあたり、子どもたちの学習環境を整えるという意味で、保護者や地域、教職員への援助も必要になるので、学校現場での援助の対象は、子どものみならず保護者、地域、教職員を多岐に渡っているともいえることができます。また、私は、学校は、子どもたちに対人援助できる(または、援助を要請する)力を身に付けさせるところだと考えています。ただ、決して新しい何かを取り入れるということではなく、今までやってきたこと、受け継がれてきたことを対人援助という視点で見直していくということで、子どもたちに社会でよりよく生きていく力がつくのではないかと考えています。

ちょっとだけ自己紹介

先ほども書きましたが、小学校に勤めて20年くらいになります。対人援助という言葉とであったのは15年くらい前でしょうか？勤務先の先輩に半ば無理やり連れていかれた研修会での出会いが始まりでしたが、なんかピンときていや、ズコーンときて、ある尊敬するお二人の追っかけを初めて今に至ります。今では立派な「変わっている先生」です。(だと、思っています。でも誇りに思っています)今回から今まで思ってきたことや感じてきたことを書くことで、また自分がどのような変化をしていけるか楽しみにしています。

【朝の会】

全員がわかるようになる授業。これは全教員の永遠のテーマであり、目標でもあります。ご存じの方も多いとは思いますが、公立学校での学習内容は、文部科学省が定めており、公立学校の教員は、学習指導要領をよりどころとして授業を作っていきます。(要するに学習内容は、法律で決められているという感じですかね。めっちゃくちゃ平たく言えば)ですから、1時間1時間の授業には、子どもたちが達成せねばならぬ目標があり、教科書を使ったり教材を使ったりしてこの目標に向かって学習活動と授業構成を考えていきます。また、その過程で「子どもたち(特定の子どもという場合もある)は、どこでつまずくだろう。つまずいた場合どのような支援を必要とするだろうか。」ということを考えます。このプロセスが、まさに対人援助ではないかと思えます。授業が終わって、目標が達成できなかった子どもに対しては、補充や追加課題という取り組みもします。(子どもにとっては全く迷惑な話ではあるのですが…)この点も対人援助といってもいいのではないかと思えます。「目の前にいる子どもたちにマッチした授業づくり」この日々の取り組みこそ学校ならではの対人援助ではないでしょうか。

【1時間目 3年 算数「時間と時刻」】

算数という教科は、答えが1つに決まっていることが多く、その1つ答えを導き出すためにたくさんの習ったことを使っていくため、苦手だと感じている子どもも少なくありません。また、日常生活と密接に結びついている領域もあるため、子どもたちの生活経験の差が出やすい教科とも言えます。今回は、生活経験や文化の違いの差が大きい子どもたちに時刻と時間の授業をした時のことを書きたいと思えます。

3年生「時間と時刻」

目標 秒について知り、時刻や時間の求め方を理解し、日常生活で用いることができる。

この単元を進めるにあたり、本校には外国籍の子どもが多数(半数以上)在籍し、一番困ったのは、「時刻」という概念がない子どもが、外国籍の子どもたちを中心にたくさんいたことです。特に外国籍の子どもは、時間も時刻もすべて「Time」で表すらしく(厳密にいえばあるのかもしれないが子どもたちの概念はここでとどまっていた)恥ずかしながら、私も初めて知ったことでした。しかも、今は、デジタル時代…。アナログの時計は学校でしか見ることがないという子どもたくさんおり、アナログの時計が読めないという頭を抱える実態からの出発でした。

そこで、教室の時計を、アナログでも、より読みやすいと言われている右のようなものに低学年を中心に変わってもらいました。そして、この時計を見ながら、担任の先生に学校生活の中で、「今の時刻は？」や「給食までの時間はあと何分？」と質問をしてもらうようにしました。日本語の学習が必要な子どもに関しては、日本語担当の先生に個別の学習を進めてもらいました。算数の授業では、図や、表を使うより時計の模型を使って、自分で時計の針を動かして、時間や時刻を求めていくという活動を取り入れました。本当に月並みな支援しかできなかったというのが悔やまれるところですが、他の先生方や子どもたちと一緒に試行錯誤、悪戦苦闘しながらなんとか単元を終えることができました。



「アナログの時計が家にあるようになって読めるようになっている。」「世界中時刻と時間の区別ある。」ということを前提に学習計画を立てないほうがいい。そのようなことが、改めてよく分かった単元でした。

【帰りの会】

私たちの周りにはたくさんの当たりまえがあるように思います。そして、その当たりまえが、通用しなかったとき、私たちは、戸惑ったり、不安になったり、その結果攻撃的になったりしてしまいがちです。学校は特に、その傾向があるように感じます。○でなければならない。●●であるべきだ。そんな真面目な気持ちは、教員として持たなければならないかもしれませんが、大多数の当たり前の中にいれば確かに安心します。ただ、目の前にいる子どもたちにその当たりまえが当たりまえではない子どももたくさんいるということを忘れないようにしたいと思います。

【放課後】

話は変わりますが、年度末です。この時期、教員が追われるのは、、、、そう、成績です。先生方は、普段の子どもたちの頑張りを知っているがゆえに、それを数値化することが、とても苦しく、この時期が一番嫌いです(少なくとも私はそうです)

中でも一番苦勞するのが、あの通知表の隅に書いてある2~3行の「所見」です。実はあの所見、書く内容から書き方、使わなければならない漢字、カタカナ、表記が決められており、それに従って書いているのです。しかも書いた文章を何度も複数の教員でチェックし、管理職もチェックし、チェックからの直し、チェックからの直し、チェックからの直し。という汗と涙の結晶なんです。そんなやめればいいのにという声が聞こえてきそうなのですが、それは、まあ、私のようなものには、なんとも。。。このお話は、別の回でさせていただくとして、みなさま、成績表の所見をご覧になることがあれば、どうぞあたたかい目で見ただけだと幸いです。